

# 序言

河野貴美子  
Wiebke DENECKE

「文」とは何か。

「文」という概念は、東アジアの文化史において特別に重要な意味をもち、また実に多様な役割を果たしてきた。文字としての「文」は、中国の甲骨文・金文まで遡るものであり、その意味するところは、人や動物の身体の模様交わった模様などを示すものであったと説明されている。それがやがて、周朝以後の古典籍において「文」はしだいに豊かな含意を育み、「文と武」、「文と質」、「文と道」などの対照図式を通して広く政治的、文化的かつ宇宙論的な意味を帯びるまでになった。そして、漢代末から六朝にかけて、「文」と「筆」は韻文と散文を区別するものとなり、より狭義的限定的用法を示しつつ、やがて「文章」や「(文)学」という意味へ発展し始めた。

古代日本においては、こうした中国の「文」に関する複層的な概念が早くから受容され、日本最初の漢詩集である『懷風藻』の序は、「文」明の始め、「文」字と儒教の伝来、「文」人であるところの天智天皇の詩宴における漢詩「文」の創作など、日本の文化史の全てを「文」の概念を通して述べている。ところが明治期になると、それ以前「文」と日本の「漢詩文」の間の特別な関係は大きく様相を変え、「ブンガク」ということばはヨーロッパの [Literature] [belles lettres] [fiction] 等の訳語として現れ、現在に至るまでそれら欧米に傾倒した「文学」(ブンガク)「

の意味によってまずは捉えられるという状況が続いている。

今日、右に述べきったような、東アジアに特有の意義をもって形成、継承されてきた伝統的な「文」の概念、また、近代に至り欧米文化の訳語として「上書き」された「文」の内実については、その問題に関心を寄せる一部の研究者を除き、ほとんど無自覚であるというのが現状であろう。

しかし「文」の意義と歴史をみるならば、「文」の概念への問題意識なくしては、日本、そして東アジアの文化の本質に迫ることは不可能なのではないか。近代以降隠蔽されてしまった「文」の概念的文化的意味と意義を再び発掘し、そのうえで、二十一世紀の現代に続く「文」の意味と意義を捉え直してみたい、これが本書「日本における「文」と「ブンガク」の出発点である。

それでは、「文」の概念的文化的な意味と意義を明らかにするためには、どのようなアプローチが有効か。本書は、およそ次の三点を目的として開始した。

まずは、「文」の歴史を検討し、日本において「文」が経験してきた過程を正しく把握し理解することである。「文」の概念が日本においていかに展開し、いかなる特徴を現してきたかという問題を幅広く調査すること。例えば、日本の「和」と「漢」の世界において「文」はどのような役割を果たしたのか。

次に、「文」をめぐる歴史の流れを理解すると同時に、我々の現在の認知の枠組みを反省的に自覚し、新たな視点を獲得する目的もある。すなわち、日本語において優勢を保っている、欧米言語からの訳語である「ブンガク・Literature」の概念を超えて、東アジアの伝統的な「文学」、あるいは明治期以前の「文」「文学」の世界をどのように捉えるべきか、また、いかにして正確に捉えていくことができるかという問題である。

そしてもう一つは、「文」の概念について、過去をふまえ、現在をとらえ、さらには将来を見通した研究を提起したいという目的もある。つまり、東アジアにおいて最も重要な概念の一つである「文」を、現在そして将来の文芸評論・文芸批評の場に引き出し、改めて正しい位置づけを行っていくことはできないだろうかという展望がある。現代

の文学研究の術語のほとんどは、欧米から輸入した [mimesis]・[metaphor]・[poesis/fiction]・[rhetoric] などのコンセプトを使用しており、「文」のカテゴリにある東アジアの「風」・「比」・「興」・「体」のような伝統的な術語を用いることはなくなっている。しかし将来、これら伝統的な術語を、欧米とは全く異なる文学的な現象を把握するためのものとして、世界の文芸批評家に向けて紹介するならば、またそこから新たな文芸批評・文学研究への刺激を生み出していくことが可能ではないか。

以上の問題意識、また目的のもと、本書は、日本における「文」の概念研究のための第一歩として提出するものである。本書の企画は、二〇二二年七月二十一日、二十二日に、早稲田大学日本古典籍研究所の主催により二日間にわたって開催したワークショップ「日本における「文」の世界・伝統と将来」に由来する。このワークショップのテーマとアプローチは、早稲田大学日本古典籍研究所長河野貴美子とボストン大学の Wiebke DENCKE (ヴィーブケ・デーネーク) が、一年余りの時間をかけてスカイプを利用して行った「サイバー研究会」を通して練ったものである。

本書は、主として、「文」の概念の「古」「今」を中心としたアプローチを展開するものである。「文」をめぐる最も大きな変化、転向は近代に生じたものであることを改めて自覚し、その後現在に至る言語意識の中に「文」の概念の源流を思い起こし、「文」の「古」と「今」を捉え直そうという試みである。

議論の焦点として設定するのは次の五項目である。すなわち、「文と言語——ふみとことば」、「文と経国」、「文士・文人」、「文と作文」、そして「文からブンガクへ」。本書では、「文」の概念の定義を探究することはひとまずおき、「文」の反対、対立概念(文と言語)、文の政治・文化における役割(文と経国)、文を具象化する社会階層(文士・文人)、文の実践とプラクティス(文と作文)、東アジアの伝統的な文の概念に上書きされた近代の「ブンガク」概念の形成(文からブンガクへ)という観点から、「文」の本質、特質に迫る。

なお、本書では、五つ目の焦点を除き、時代順に各論考を並べるといった通常よく行われる編集方法ではなく、問題

意識から出発する目次構成をとった。また、総合的に全景をつかむというよりも、事例研究を報告する内容となっている。

以下、本書の構成と各論考の内容を簡潔に紹介する。

1 「文と言語——ふみとことば」では、「文」の概念の多層的な意味、連想、含意を問う。古代中国における「文」と「言」「語」、「文」と「書」「記」の関係はいかなるものであり、その文化概念は日本でどのように受容され、適用されたのか。また、日本における「文／ふみ」の意味は和文体と漢文体の文献の中でどう異なるか、といった問題を考察する。

まず、鈴木貞美氏には、「東アジアにおける「文」の概念をめぐる覚え書き」と題して、「文」の概念に関わることからを総合的に論じていただいた。前近代の日本の知識層の漢文リテラシーや近代日本の言語に何が起こったのかについて、正確にその概念編制を把握すべきだという問題意識のもと、古代中国から近代日本に至る「文」とそれに対する概念とのダイナミズムを探究する論である。

新川登亀男氏の「日本古代の文字文明」は、文明史の観点から、日本古代の文字のあり方と文明化の過程を検討し、また、文字文明とはなにか、に迫る。物や生産の回路、社会、制度と文字との関係、また「書」や「文」という文字の現れ方から「記」す行為の意味を追究し、「文」の概念成立以前の文字文化、文字技術の概念を考察する。

河野貴美子の「言」「語」と「文」——諺を記すこと」は、古代中国と日本の「言」「語」と「文」の概念について「諺」を記す事例を通して検討する。「諺」は、中国では本来ことば(言「語」)の世界の現象であったのに対して、日本では中国古典籍中の「文」を通してそれらが学ばれ、消化され、日本の「言」「語」と化していった様相をみる。

陣野英則氏の「源氏物語」の「ふみ」と「文」——「少女」巻の恋文から漢学・漢籍・漢詩まで」は、『源氏物語』少女巻における「ふみ」の用例を整理し、手紙をあらわす「ふみ」と漢学・漢籍・漢詩などをあらわす「ふみ」とが

周到なたくらみのもと交錯して現れることを論じる。和文体のテキストにおいては「文」の表記方法や読み方、意味には固定性がない点が明らかにされる。

2 「文と経国」は、作文の芸術と統治の芸術との間にどのような関係が存在するのか、大陸の「文」の文化やイデオロギー、そして行政において用いられた文体は、日本の政治、行政、外交、すなわち「経国」にどのような影響を与えたか、支配層の価値観、道徳観、文章・文学観の形成をみる。

高松寿夫氏の「大宝二年度遣唐使が日本の文筆にもたらしたもの——慶雲三年正月十二日勅書を中心に」は、大宝二年度遣唐使によって文献が収集将来された後の、文例学習の具体的な様相を考察する。勅書を例として、文書の作成に『文館詞林』が利用された可能性を提案するとともに、大陸から導入された文字文化、文体方式がいかに古代日本の統治法に影響したかを検討する

Wielke DENECKE (ヴィーブケ・デーネーク)の「嵯峨朝における「文章経国」再論」は、これまで「国風暗黒時代」と否定的な解釈でとらえられてきた嵯峨時代の文学史的意義を再考し、嵯峨時代は、日本における「文章」の新しい段階と概念、「近代」という時代への認識が提出された、日本文学史における革命的ともいべき画期であったと位置づける。

山田俊治氏の「福地源一郎の「文」学」は、幕末から明治時代にかけての転換期において、当時の「言文一致論争」に一石を投じた福地源一郎のヴィジョンをたどる。福地にとつての「文」学は、学問の根幹であり、また、国家を表象する文化であり、独立国民の表現として道徳的価値のある文章を指すものであり、品位をもつた「日本通俗文」が理想とされたのであった。

3 「文士・文人」は、「文」の担い手たる人々をめぐる論考である。「文士」「文人」という概念は、古代から近代に至る日本においてどのような意味をもつたのか、各時代の社会構造において「文士」「文人」はいかに位置づけられてきたのか、また、「文人」の精神なるものは現在にも続いているのかなど、「文士」「文人」の通史的な連続性と非連続性をみる。

吉原浩人氏の「文道の大祖」考——学問神としての天神の淵源」は、菅原道真を学問神すなわち「文道の大祖」と称した慶滋保胤のことに注目し、「文道」という語を通して、平安期当時、文章の撰述を職掌とした特定の学問の家の門流意識や、白居易が及ぼした多大な影響を明らかにする。

佐藤道生氏の「「文章」と「才学」——平安後期の用例からその特質を探る」は、平安時代において、「文章」という語が儒者を評価する基準としてしばしば「才智」「才学」と対になって現れること、そこでの「文章」の語はもっぱら「詩」を意味するものであったことを『中右記』と『玉葉』及び『古事談』の例から読み解く。

林浩平氏の「〈文人〉精神の現代的展開——服部南郭・祇園南海から吉増剛造・車谷長吉まで」は、服部南郭や祇園南海以来の文人の系譜の核をなしたのは反骨精神、批評精神であったととらえ、近代の佐藤春夫や石川淳、萩原朔太郎、三好達治、安東次男から、現代の吉増剛造、車谷長吉、石川九楊に至るまでの〈文人〉精神なる現象について議論する。

4 「文と作文」は、作詩、作文の行為がいかなる意識のもとに行われたかを考察する論考。「文」と「史」の関係、また、中国の書物や故事あるいは文に関わる理論や志向の受容、また、古代日本における文学観念の展開を実際の作品に沿って検証していく。

瀬間正之氏の「『古事記』序文生成論典拠再考——上代日本の作文の一例として」は、『古事記』序文冒頭の生成論が長孫無忌「進五経正義表」のほか、『弁正論』が引く『華林遍略』などを典拠とすることを指摘するとともに、それらの典拠が内包する思想がどれほど意図的に利用されているのかを明らかにする。

蔣義喬氏の「詠物と言志——『懐風藻』から勅撰三集に至る」は、『懐風藻』から勅撰三集に至る日本古代漢詩における詠物の愛好に注目し、奈良・平安初期の漢詩制作の環境が中国六朝の詩壇ときわめて似ていること、そして、言志への志向の希薄さは、陸機「文賦」の「体物」思想の影響によることを指摘する。

張哲俊氏の「詩歌の日記化と白楽天の詩歌」は、古代中国では「文」と「史」の関係が緊密に論じられてきたことを問題意識の基点とし、歴史に繋がる「文」として、詩歌の日記化、具体的には、白居易詩のしばしば長文におよぶ

詩題のあり方を、「史」に関わる日記化という観点から説く。

後藤昭雄氏の「〈花鳥風月〉形成への道——平安朝漢詩文に見る」は、詩歌詠作の代名詞のごとくとらえられてきた「花鳥風月」の語を再検証し、平安期における文学意識の形成を考察する。詩文の制作と密接に関わる「風月」の語が『懐風藻』からみえるのに対して、「花鳥」の語は菅原道真以降に現れ、詩序や和歌序において詩歌の詠作の意を含む例が確認できるようになることを指摘する。

Jennifer GUEST (ジェニファー・ゲスト) 氏の『「新楽府略意」と『唐蒙求』——「新楽府」の説話的側面』は、十二世紀後半に信救が撰述した「新楽府」の注釈書『新楽府略意』が、『唐蒙求』なる珍しい著作の記述をも用いつつ、「新楽府」作品の歴史的背景を説話的に語り直し、書き直しを行うことに注目する。そしてそれは、同時期の歌論書、説話集などにおいても、共通して行われていた漢故事の受容であり、学問的創造なのでもあったとする。

5 「文からブンガクへ」は、明治期以降、西洋的な「ブン」の世界との出会いを経て、日本では伝統がいかにとらえられ、反省され、そして日本近代のいかなる「文」が生み出されたのか。新聞、小説、雑誌、それぞれの試行錯誤と実践のあとをたどる。

Mathew FRALEIGH (マシュー・フレリー) 氏の「成島柳北の戯文と擬文——『伊都満底草』から新聞雑録まで」は、明治七年、『朝野新聞』局長となった成島柳北が、ジャーナリストという自らの新たな立場をいかに意義づけ位置づけていったのかを考察する。著名な漢文作品のパロディーや、「雑録」というコラムに掲載された文章を例として、伝統的な文人との対比において成島柳北が模索したジャーナリスト像に迫る。

Daniel POCH (ダニエル・ポツホ) 氏の「感情表現としての「文」の近代——夏目漱石『草枕』における詩歌と自然と「浪漫主義」は、日本の「文」の世界に伝統的な手法としてあった、「景物を通して人間の感情を表す」ことが、近代の作品においてはいかに問題化され、試行実践がなされたのか、夏目漱石の『草枕』を例に、そこにみえる俳句、英詩、漢詩が作品内でのいかなる機能をもつものとなっているかを読み解きつつ、伝統的な「文」との離脱と反復の様相をとらえる。

宗像和重氏の「雑誌『文』における「文」——言文一致論争を中心に」は、明治二十一年から二十三年に刊行された雑誌『文』をとりあげ、そこに目指されたものと、言文一致論争など、当時の「文」の概念の揺れと実情を重ね見る。創刊当初は「普通教育ノ普及上進」を目的としていた雑誌『文』は、やがて「文学」を扱う対象の筆頭に掲げるようになる。それはちょうど、『Literature』の訳語として『bungaku』が結びつけられた時なのであった。

これらの論考の締めくくりとして、神野藤昭氏には昨夏のワークショップの総括とともに、今後の展開への提言を含め、「文」の学の近代へ——小中村清矩と芳賀矢一との距離」と題して、「文」の伝統と近代の「文」学との連続性と転換の実相について、明治期の帝国大学で「国文学」を教え学んだ小中村清矩、芳賀矢一師弟や古典講習科設置のことで通して、受講録などの貴重資料も交え紹介していただいた。

「文」の概念をめぐる考察と研究は、日本の「文」(ことば、文字、文章、文(学)、詩文、書物、学問)に関心をもつ者にとって、共通の、そして普遍的なテーマであることは間違いない。このたびの特集企画は、今後さらにその議論を展開していくための試みとして、確かな手応えを残すものとなった。

今後は、日本の「文」と「ブンガク」の世界について、改めてその実態、特質、意義をとらえるべく、アプローチを継続していく計画である。

具体的には、「文」をキーワードとして、「文」の概念史 (Begriffsgeschichte, conceptual history) を見直し、体系的に捉えていきたい、という目標がある。すなわち、古代から近現代に至るまで、「文」とはいかなるものであったのか、「文の環境」を見通しつつ「文化史」を再構築するならば、日本の文化、社会の本質を改めて正しく捉えることが可能になるのではないか。

たとえば、日本の「文」をリードした重要人物に注目し、「日本文人概念史」を描きだすこと。あるいは、これまでの「日本文学史」「日本文化史」においてあまりスポットが当てられてこなかった資料や作品(幼学書、注釈書、歌学書などの理論書、日記や記録類、そして漢詩漢文、和漢混淆文の著作)の中から、「文」をめぐる古代における研究成果、

学問の蓄積をたどることで、それぞれの時代に「文」がいかにかに研究され、いかに反省され、いかなる方向性が導き出されていたのかをみる。また、制度、教育の中で、いかなる「文」が理想として掲げられてきたのか。そこにいかなる試行錯誤や葛藤があったのかを明らかにすること、などである。

今回のプロジェクトをきっかけとして、以上のような目論見のもと、「文」の概念をめぐる研究をすすめ、新たな一つの、「日本の文」の体系を構築していきたい。そうしたさらなる課題への「大きな第一歩」として、本書を発信したいと思う。

なお、昨夏のワークショップ「日本における「文」の世界・伝統と将来」の開催に際しては、早稲田大学総合研究機構、早稲田大学国際日本文学・文化研究所、ボストン大学人文科学学院 (College of Arts and Sciences, Boston University) とボストン大学アジア研究センター (Center for the Study of Asia, Boston University) から多大なる後援をいただいた。ここに記して感謝を申し上げる。

また、勉強出版の吉田祐輔氏には、本特集企画を実現していただき、編集においてはひとかたならぬお力添えをいただいた。心より御礼を申し上げます。

二〇一三年三月